

池の水全部抜いたけど

池の水を抜いて環境を整える「かいぼり」の先駆地となった井の頭公園（東京都三鷹市・武蔵野市）の井の頭池に、新たな課題が生じている。前回の実施から5年、一度は外来魚を駆除し、水質は改善されたが、今は「侵略的外来種」の水草が池を覆い尽くしている。何が起きているのか。

東京
インサイド



水を抜いた井の頭池で、大型魚などを捕獲する人たち。2014年1月、東京都の井の頭公園

井の頭公園 新たな外来種繁殖

「エビだ!」。子どもたちから歓声があがった。井の頭池で10月中旬、ボランティアグループ「井の頭かいぼり隊」が開いた観察会。かいぼり後に増えた在来種のヌカエビやギンブナを紹介すると、子どもたちの視線が集まった。

その隣では、NPO法人「生態工房」のメンバーらが浮輪を使って池の水面を移動しながら、外来種の水草やアメリカザリガニを駆除していた。佐藤方博事務局長は、「最近では外来種のコカナダモの増加に悩まされている」と話す。

井の頭池では開園100周年を前に2014、18年、生態工房などがかいぼりを3回実施した。肉食性のオオクチバス（ブラックバス）やブルーギル、アメリカザリガニなどを駆除し、2度目の後には、絶滅したと思われるいた幻の水草「イノカシラフラスコモ」が復活。水中の透明度が上がリ、一時はネット上で「モネの名画『睡蓮』のよう」と評判になった。

それから5年。モネの睡蓮は姿を消した。今年10月末に水底をのぞく



コカナダモが繁茂する井の頭公園の「井天池」=22年7月、東京都西部公園緑地事務所提供

と、至る所にコカナダモの姿があった。公園を管理する都西部公園緑地事務所が実施した今年6月の調査では、コカナダモは昨年比で推定2・6倍に大繁殖し、かいぼり後に復活が確認された絶滅危惧種で在来種の水草「ツツイトモ」をほぼ駆逐していったことが判明。9月の調査ではツツイトモはなく、コカナダモのみが確認された。

コカナダモは日本生態学会による「日本の侵略的外来種ワースト100」のひとつ。1960年代に琵琶湖で発見され、各地に拡大。琵琶湖や、80年代には群馬県の尾瀬沼でも異常発生が問題化した。拡大するスピードが圧倒的に速い。在来種の生息地を占拠し、成長に必要な太陽光や酸素も奪うという。

したことにより、これらに食べられていたカエルとザリガニが増えたと考えられる。

野山北・六道山公園（武蔵村山市など）では、かいぼり後に釣り人によるバスの違法放流が問題化。放流を防ぐためにボランティアが日常的にパトロールしている。

伝統的技術だったかいぼりの現代版を農村で復活させようという動きもある。「生態工房」は長野市信里地区のため池で毎冬、かいぼりを実施する。高齢化や過疎化で手入れができなくなり、外来種のパスやブルーギルが侵入し、淡水魚「シナイモツゴ」が絶滅寸前になっていた。片岡友美理事長は「今後は地方に技術を伝えていき、全国でかいぼりの文化を残していきたい」と話す。（比嘉展政）

農村で復活の動きも

かいぼりは、「東京のオアシス」とも呼ばれる井の頭池での実施をきっかけに全国的に注目を集めた。テレビ東京の番組「池の水ぜんぶ抜く大作戦」なども動きを後押しした。

都は18年度から、都立48公園にある約100池のうち、年度ごとに2億円の予算を組み、10の池でかいぼりを実施した。都西部公園緑地事務所の担当者は「井の頭池をきっかけに全国に広がり、保全活動として市民権を得た印象だ」と話す。

ただ、かいぼり後に新たな課題に直面したのは井の頭池だけではない。狭山公園（東村山市など）の宅部池ではウシガエルとアメリカザリガニが急増した。バスとゴイを駆除

湖沼や河川の水生植物に詳しい東京農工大グローバル教育院（陸水学）の片桐浩司講師は、「井の頭池は再度かいぼりが必要な状態になっている」と話す。「ボランティアによる駆除ではコカナダモの繁殖スピードに追いつかず、根本的な解決にはならない。かいぼりは、その都度の池の問題に対応していくために定期的に行われるべきだ」。ただ、同事務所は「かいぼり後に在来種中心の生態系が作られ、現在は良い状態で維持されている」という認識で、再度のかいぼりは予定していない。永田雅之・工事課長は「かいぼりは人的にも金銭的にもかなりの労力がかかり、復活した外来種を一定数犠牲にすることにもなる。慎重に判断する」と話す。